

序

平成 26 年は科学技術と研究倫理について深く考えさせられる年となりました。1 月には第 2 の新型万能細胞と期待された「STAP 細胞」の研究成果が公表されたものの、その再現ができないばかりか、研究不正を思わせる検証結果が提出され、掲載論文が取り下げられました。一方、9 月には、iPS 細胞を使った世界初の移植手術が成功し、新型万能細胞が実用段階に入った年でもあります。情報処理技術の開発・応用が急速に進む中で人が適応できず振り回されているようにも感じます。Web を使った情報の入手・利用は初中等教育段階でも盛んに行われていますが、そこでは情報源の確かさを自分で判断し、内容を理解して、自分の言葉で表すことを、しっかり教育していく必要があります。教育現場では成果ばかりでなく、その過程にこそ重きを置く必要があると思います。

本校は国立大学法人筑波大学の附属学校の一つとして、附属学校の中期目標として掲げられた「先導的教育拠点」、「教師教育拠点」、「国際教育拠点」をキーワードとした種々の活動を行っています。附属学校として大学との連携強化はもちろんのこと、本校 OB や筑波大学教員による社会貢献プロジェクト「筑駒アカデメイア」では一般向けの講演会と本校生徒による小学生向け実験実習などで、地域貢献にも積極的に取り組んでまいりました。「教員免許状更新講習」においても、多くの幅広い講座を開講するとともに、「附属学校実践演習」による公開授業を毎年開催し、受講者の方々から高い評価をいただいております。また、本校は 2002 年以来、スーパーサイエンスハイスクール (SSH) に指定されており、2012 年度からは「豊かな教養と探究心あふれるグローバル・サイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」と題した 3 期目、5 年間の SSH 事業を開始いたしました。さらに、筑波大学の特別プロジェクトとして「トップリーダー育成のための教育の高度情報化事業－図書・情報メディアの利用を進化させた中高大連携と国際交流－」を 2012 年度から実施しました。

本論集は、本校における日常的な教育研究・教育実践の成果をまとめたものです。各教科の研究プロジェクトの成果に加え、今回は以下の特色ある研究が掲載されました。教育の ICT 化に向けた検討・研究では、教育の高度情報化事業最終年のとりまとめとして「筑駒図書館の変遷」や、ICT 利用を目指した独自の「図書館情報検索」システムの開発成果に加え、オンラインストレージの利用に関する実践報告が掲載されました。また、高校 2 年生を対象としたゼミナールでは、真の障害を知り「ともにいきる」共生社会についての成果が報告されました。これは、筑波大学の特別支援学校と連携したダイバーシティを理解し推進する人材の育成につなげるインクルーシブ教育の実践成果の一つです。更に、中学 3 年対象の教科の枠を超えた個別課題について扱うテーマ学習から、国語科と社会科が連携して「地域ガイドブック」づくりに取り組んだ成果も報告されております。

この論集に記載の内容が、関係各位の教育活動のご参考に少しでもなるならば幸いに存じます。加えて本校及び関係各位の教育実践のより一層の充実をはかるため、本論集への忌障のないご意見、ご批判、ご提言を賜りますようお願い申し上げます。

2015 年 3 月

筑波大学附属駒場中・高等学校
校長 林 久喜